南开日本文学精品教材

日本文学简史

Riben Wenxue Jianshi

きんだい

李先瑞 · 编著

南開大學出版社

南开日本文学精品教材

日本文学简史

李先瑞　编著

南开大学出版社
天津

图书在版编目(CIP)数据

日本文学简史：日文 / 李先瑞编著. —天津：南开大学出版社，2008.4

南开日本文学精品教材

ISBN 978-7-310-02887-0

Ⅰ.日… Ⅱ.李… Ⅲ.文学史—日本—高等学校—教材—日文 Ⅳ.I313.09

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 031635 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人：肖占鹏

地址：天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码：300071

营销部电话：(022)23508339 23500755

营销部传真：(022)23508542 邮购部电话：(022)23502200

*

南开大学印刷厂印刷

全国各地新华书店经销

*

2008 年 4 月第 1 版 2008 年 4 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 10.125 印张 288 千字

定价：18.00 元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

前　言

日本文学作为世界文学的一个重要部分，它已有两千余年的历史。在漫漫的历史长河中，日本文学经历了由自然发生到深受汉文学影响，再到恢复本国文学传统，最后到大力吸收西方文学理念和文学手法的发展历程。在其文学发展的进程中，日本始终坚持兼收并蓄，大力吸收优秀的外来文学和文化，使得日本文学在世界文学中一直占得重要的一席。

本教材名曰《日本文学简史》。之所以称之为“简史”，是因为日本文学的内容浩如烟海，本教材只是提取其中精华部分进行了简要地阐述。本教材在努力吸收其他教材优秀传统的基础之上，力求创新。具体体现在以下几个方面：

一、大量设置了课后练习题，使广大学生在学习了相关内容之后可以有的放矢地进行知识点的巩固。本人认为，学习文学史如果没有课后练习题来加深理解，学生往往会顾此失彼，最后只是知道一点皮毛，对所学知识点印象不深刻。

二、专门增设了战后文学的章节，并进行了较为详细的阐述，这对于广大学生加深战后文学的知识素养大有裨益。随着时间的推移，战后文学实际上已是一个相当长的时间段，迄今已六十多年，已接近近代文学（1868～1945）的时间。而且这期间日本有两位文学家获得诺贝尔文学奖，产生了大量脍炙人口的作品。

三、单独设置一节对战后女性文学进行了较为系统的梳理。随着日本战后民主改革的实施，女性作为占人类总数一半的群体，女作家的创作日益活跃，也产生了为数众多的优秀作品，日本也不例外。因此，了解日本女作家的作品也是文学史学习的一项重要任务。

四、对近现代诗歌、和歌，俳句以及近现代戏剧也作了较为详

细的解说。因为上述内容是文学的有机组成部分，文学史内容不可能也不应该割舍这些内容。

由于编写时间较为仓促，加之本人力所不逮，错误或不足之处在所难免，希望广大同仁给与批评指正。

李先瑞

2007 年 12 月于古都洛阳

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目　次

第一章　上代の文学　/1
第一節　上代文学概観　/1
第二節　詩歌　/3
　一、上代歌謡　/3
　二、万葉集　/5
　三、漢詩文　/8
第三節　神話、伝説、説話　/9
　一、神話　/9
　二、伝説　/11
　三、説話　/12
第四節　祝詞、宣命　/12
　一、祝詞　/12
　二、宣命　/13

第二章　中古の文学　/16
第一節　中古文学概観　/16
第二節　詩歌　/18
　一、和歌　/18
　二、歌謡　/22
　三、漢詩文　/23
第三節　物語と説話　/24
　一、物語　/24
　二、歴史物語　/32
　三、説話　/34

第四節　日記、随筆　/36
一、日記　/36
二、随筆　/41

第三章　中世の文学　/51
第一節　中世文学概観　/51
第二節　詩歌　/53
一、和歌　/53
二、連歌　/56
三、歌謡と漢詩文　/58
第三節　随筆、日記　/59
一、随筆　/59
二、日記、紀行　/63
三、法語、キリシタン文学　/65
第四節　物語と説話　/67
一、軍記物語　/67
二、歴史物語と史論　/71
三、擬古物語　/73
四、説話と仏教説話集　/73
第五節　芸能　/75
一、能楽　/75
二、狂言と幸若舞　/76

第四章　近世の文学　/84
第一節　近世文学概観　/84
第二節　詩歌　/86
一、俳諧　/86
二、狂歌と川柳　/93
三、和歌と国学　/94
四、漢学と漢詩文　/96
第三節　小説　/97

一、仮名草子　/97
二、浮世草子と井原西鶴　/98
三、草双紙　/101
四、読本　/102
五、洒落本、人情本、滑稽本　/106
第四節　芸能　/107

第五章　近代の文学　/118
第一節　近代文学概観　/118
一、近代文学の時代背景　/118
二、明治期の文学　/119
三、大正期の文学　/120
四、昭和初年・十代の小説　/121
第二節　明治・大正時代小説と評論　/122
一、啓蒙期　/122
二、写実主義　/125
三、擬古典主義　/127
四、浪漫主義　/131
五、自然主義　/137
六、耽美主義　/145
七、漱石と鴎外　/149
八、白樺派　/155
九、新思潮派　/162
第三節　昭和初年・十年代の小説と評論　/166
一、プロレタリア文学　/166
二、新感覚派　/171
三、新興芸術派　/174
四、新心理主義　/176
五、文化統制下の文学　/178
第四節　詩歌　/186
一、近代詩　/186

二、現代詩 /192
三、短歌 /196
四、俳句 /200
第五節 劇文学 /203

第六章 戦後の文学 /214
第一節 戦後民主主義文学 /214
一、戦後民主主義文学の時代背景 /214
二、主な作家と作品 /215
第二節 無頼派文学 /224
一、無頼派文学の成立 /224
二、太宰治の文学 /225
三、坂口安吾の文学 /229
四、石川淳と伊藤整の文学 /231
第三節 戦後派文学 /233
一、戦後派文学概観 /233
二、“第一次戦後派”の作家達 /238
三、“第二次戦後派”の作家達 /245
第四節 “第三の新人”の文学 /250
一、“第三の新人”の文学特徴 /250
二、安岡章太郎の文学 /252
三、吉行淳之介の文学傾向 /254
第五節 高度成長期の文学 /256
一、この時期の文学の特質 /256
二、開高健の文学 /259
三、大江健三郎の文学 /261
四、井上靖と中間小説 /263
五、昭和四十年代の文学 /266
六、内向の世代の文学 /267
七、昭和五十年代の文学 /268
第六節 戦後女性文学 /269

一、戦後女性文学概観　/269
二、個性ある女作家達　/272
第七節　戦後の評論　/275
一、「近代文学」同人の評論　/275
二、昭和三十代とそれ以後の評論　/277
第八節　戦後の詩歌　/278
一、戦後の詩　/278
二、戦後の短歌　/280
三、戦後の俳句　/281
第九節　戦後の劇文学　/282
一、『桜の園』の合同演出　/282
二、既成劇作家の活躍　/283
三、新劇作家の登場　/283

付録　/289
参考答案　/289
日本文学史年表　/292

参考書目　/313

第一章　上代の文学

第一節　上代の文学概観

◆大和朝廷の成立

大昔に人々が神を祭り祈った時、また祖先を敬い後世に語り伝える時に使われた言葉が文字の起こりだと考えられる。文学史では文学の起こりから、七九四年、平安京に遷都するまでの期間を上代という。

日本人の祖先が日本列島に住みついてから数千年を経て、新石器時代を迎える。そのころの人々は狩猟や食物の採集を中心に移動生活を営んでいた。それが縄文（じょうもん）、弥生（やよい）、古墳（こふん）、飛鳥（あすか）、奈良（なら）と時代が移るに従って、農耕を中心とした定住生活へと変わっていった。そして人々の集落は村となり、それが集まって小さな国家となっていった。四世紀ころには天皇を中心とした大和朝廷が勢力を持ち、小国家を統一した。

◆中国大陸との交流

大和朝廷においては土地や人々を所有する豪族の力が強かった。そのため天皇の地位は不安であった。しかし、その後、朝鮮半島との接触を通じて中国大陸の文化や仏教を導入し、さらに遣隋使、遣唐使を派遣して中国の国家制度を学び取ることにより天皇を中心とする国家が形作られていった。大化の改新が断行され、七世紀後半には天皇中心の律令国家が出来上がった。

◆祭りと上代歌謡

古代の人々は集団生活を営みながら、人間の力を超えた自然を恐れ、神の存在を信じた。そして、集団で神々を祭る行事を行い、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

生活の繁盛と幸福を祈った。祭りは人々の生活と密接した非常に重要な行事であった。やがて祭りでは、楽器や踊りを交え、節を付けて神々への祈りや感謝を歌うようになった。これを上代歌謡という。祖先の業績を称えることば（語り）や湧き出る感動を率直に歌ったことば（歌い）などは、子孫へと語り継がれていった。

上代の歌謡はほとんど伝わっていないが、中には書物に記載されて今日まで残っているものもある。このうち、最も多くの歌謡を載せているのは『古事記』と『日本書紀』であり、この両書の歌謡を総称して「記紀歌謡」という。

◆口承文学から記載文学へ

原始未開の社会では、飢えや死などの生活や生命の不安を克服するための呪術信仰が盛んで、その呪術的祭式が共同体の重要な行事だった。そこでは音楽を伴いながら願望を実現するための唱え言が語られ、集団の感情を表現した歌謡が歌われた。これらの歌謡や語りごとは、呪術を信じた集団の人々の熱い心情を表現しながら、次第に洗練されていった。やがて生産技術の発達により呪術信仰が衰えると、歌謡や語りごとは祭式から離れ、人々は歌うことと語ること自体を目的として、その中に楽しみや喜びを見出すようになった。こうして文学が祭式から分化、独立する。しかしまた呪術的祭式は大規模化した国家の秩序維持、統一強化のための服従礼儀や支配礼儀に改変されて利用され、歌謡や語りごとは政治的性格を加えながらますます発展していった。

四、五世紀のころから漢字は日本で用いられるようになった。最初は中国大陸から渡ってきた人だけが用いていたと思われるが、やがて、日本語を表わすことができるように表記法に工夫を凝らして日本人も用いるようになった。こうして口承で伝えられた多くの語りごとや氏族の伝承が文字に記録されるようになった。

◆律令（りつりょう）国家体制整備のため

大和朝廷は天皇を中心とした中央集権体制を確立するために、歴史書や地誌の編纂を行った。史書『日本書紀』、地誌『風土記（ふどき）』

はいずれも官命を受けて編まれたものである。これらは、以前から人々の間で口承で伝えられていたことを、文字を使って記録した記載文学である。

◆「個」の目覚め

和歌では柿本人麻呂らの活躍により個人の感情が表わされるようになった。「個」に目覚めた上代和歌の集大成が『万葉集』である。

『万葉集』は主な歌人の活動時期や社会情勢により、四期に分けられる。初期万葉では純粋・素朴な歌風であったが、末期では中古の『古今和歌集』に通じるような繊細な歌風へと変化していった。また、歌人の階層も天皇から農民まで、地域は東国から九州までと極めてスケールが大きい。

◆漢詩文の流行

天智天皇が創作を奨励したこともあって、漢詩文の素養は、当時の知識人たちにとって必要不可欠のものになっていた。しかし、作品は独創性に乏しく、中国六朝時代の模倣に終わってしまったものが多い。

◆「まこと」の文学

総じて上代の作品には、明朗素朴で男性的なたくましさ、力強さが感じられる。これは『宣命』の中にある「明き清き直きまことの心」から生まれた「まこと」の文学であった。

第二節　詩歌

一、上代歌謡

和歌が発生する以前に、古代社会の人々の感情を表現しているものは歌謡である。歌謡は祭式や酒宴などの共同体の集会、あるいは作業など、多くの人々がなんらかの行事や仕事を共にする場

で、感情の高まりが短い叫びの言葉や掛け声として表わされたものである。歌謡もまた集団の場で伝承されるうちに洗練され、文学性を持つようになった。舞踊や楽器の伴奏を伴い、節をつけて繰り返して歌われるのだから、言葉に韻律があり、叙情的な内容を有している。

上代歌謡の多くは、『古事記』、『日本書紀』に載っており、『風土記』『古語拾遺』『万葉集』『琴歌譜』『仏足石歌碑』などにも収められている。上代歌謡は、長い伝承の期間を経た後に、和歌の成立に強い影響を及ぼしたが、本来歌われるものである点で、文字にしるして読まれる歌である和歌に対するものである。

『古事記』『日本書紀』にある歌謡はまとめて「**記紀歌謡**」と呼ばれている。その数は、重複を避けて数えれば約二百首ある。本来は、当時の人々の祭りや生活の中で伝承され歌われたと思われる歌謡が、記紀の神話や伝説と結びつけて引用されているものが多い。歌謡の内容は、狩猟、祭り、恋愛、酒宴などであり、人々の生活全般にわたり、古代社会の人々の息吹が生々しく感じられる。表現技法は対句や同音の繰り返しなどが多用され、枕詞や序詞も多い。

歌謡の句の音数は五音・七音のものが多いようであるが、そのほかの音数も少なくなく、和歌と比べるとまだ不整頓で五音七音に整っていないものが多い。歌体は片歌（五・七・七または五・七・五）、五・七・七を二回繰り返した旋頭歌（五・七・七・五・七・七）、短歌（五・七・五・七・七）、長歌（五・七・五・七…五・七・七）、仏足石歌体（五・七・五・七・七・七）などがある。この中の旋頭歌は問答の歌が多く、後の連歌へと発展して、短歌は和歌の代表的形式となったのである。

愛しけやし　我家の方よ　雲居立ち来も　　（片歌『古事記』より）

［口語訳］　なつかしいことよ。我が家の方から、雲が湧いてくるよ。

八雲立つ　出雲八重垣　妻ごめに　八重垣作る　その八重垣を　　（短歌

『古事記』上巻）

［口語訳］　（八雲立つ＝枕詞）出雲の国に、八重垣の宮殿。妻がこもり住む宮殿を建てる。その八重垣の宮殿よ。

御足跡（みあと）作る　石の響きは　天に到（いた）り　土さへゆすれ　父母がために　諸人（もろひと）のために　（「仏足石歌」より）

［口語訳］釈迦牟尼仏の足跡を刻みつける石の響きは、高く響いて天までとどき、大地をも振動させ、その功徳は、天地を感動させよ。父母の追善のために、衆生の救済のために。

二、『万葉集』

『万葉集』は現存する日本最古の歌集である。二十巻で約四千五百首の歌を収めている。万葉集以前にも幾つかの歌集が存在したが、それらは『万葉集』の資料として利用された部分が、断片的に『万葉集』の中に残っているに過ぎない。『万葉集』の成立過程は複雑で、不明な部分も多いが、数次の編集作業を経て、ほぼ現在の形に整えられたのは奈良時代末期と推定されている。編者は全巻に渡って手を加えた者として大伴家持（おおともの やかもち）が有力視されている。

記紀歌謡とは違ってほとんどの歌は五・七音によって構成される韻律に統一されており、短歌が支配的になっていく傾向も明らかに見えるが、長歌・旋頭歌などの多様な歌体があり、また貴族の叙情詩ばかりでなく地方の民衆の歌謡も豊富に収められいて、開花期における日本の抒情詩の豊かさを示している。歌風も時代によって変遷はあるが、流麗典雅な平安の和歌に比して、対象の把握や感情の表白が直接的で力強く、健康な人間性の満ち溢れた歌が多い。

四千五百首のうち、短歌が約四千二百首、長歌が二百六十首、旋頭歌（せどうか）が約六十首、連歌体一首、仏足石歌一首などがある。基本構成は必ずしも統一されていないが、雑歌・相聞・挽歌の三大部立てに分けられる。その内部で年代順に配列されている。また、巻に

よっては正述心緒歌・寄物陳思歌という分類法や、四季によって配列する方法も行われている。

作者層は天皇から一般人にいたるまで幅が広く、地域が大和を中心にしながらも、東国、九州などと、広がりがある。漢字を表音文字として用いた万葉仮名は、表記の特徴となっている。

『万葉集』は歌風の変遷に従って、通常四期に分けて考察されている。

第一期——舒明天皇（629年即位）の時代から壬申の乱（672年）前後まで。和歌の発生する時期で記紀歌謡の末期と重なっており、和歌の黎明期である。この時期は政治的激動の時期で、皇室を中心にさまざまな刺激を受けて個性の自覚が進んでいった。このような中で、歌は上代歌謡のように集団の生活を背景にした歌から、個性的な叙情歌へと変化していった。感動を率直に表現した素朴な歌風が特徴である。皇室歌人が多く出たが、代表歌人としては、舒明天皇、額田王などがいる。そのうち額田王が特に優れている。

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は、煙たち立つ　海原は　鴎立ち立つ　うまし国そ　蜻蛉島、大和の国は　（舒明天皇　巻一）

［口語訳］　大和には群がる山々があるが、よく形の整った天の香具山に登り立って国見をすれば、広い国から煙が立ちに立ち、広い海からは鴎がしきりに立つよ。良い国であるよ、（蜻蛉島＝枕詞）大和の国は、

第二期——壬申の乱（672）前後から平城京遷都（710）まで。律令国家が発達していった活気に満ちた時期で、宮廷歌人という専門の歌人が活躍し、皇室を称える歌が多く詠まれた。表現技法が発達し、和歌の形式が完成したのもこの時期である。特に長歌の発達は著しく、柿本人麻呂や持統天皇などによって完成された。

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山。　　持統天皇　（雑

歌、巻一)

［口語訳］　春が過ぎて夏がやって来たらしい。真っ白な衣が干してある、天の香具山に。

第三期――平城京遷都（710）前後から天平五年（733）ごろまで。律令国家が完成し、大陸の思想や文化が導入されるなど、知識人が輩出した。知的で個性的な歌人が多く出た。彼らは個性豊かな歌を詠み、万葉集の最盛期を迎えた。最盛期の歌は繊細で洗練されており、初期の素朴さは失われていった。また、代表的な歌人は山上憶良（やまのうえのおくら）、大伴旅人（おおともの たびと）、山部赤人（やまべのあかひと）、高橋虫麻呂（たかはしの むしまろ）などがいる。

我妹子（わぎもこ）が植ゑし梅の木見るごとに心むせつつ涙し流る。　大伴旅人　（巻三、挽歌）

［口語訳］　我が妻が植えた梅の木を見るたびに胸がいっぱいになり涙が流れる。

第四期――奈良時代前期の天平六年（734）から、『万葉集』の最後の歌が作られた七五九年までの約二十五年間である。政治権力をめぐる対立が相次ぎ、律令制の矛盾が表面化し始めた時期である。抒情詩である和歌は、このような社会では力を発揮することができず、次第に男女の私的な感情や個人の孤独なつぶやきを歌うだけになっていた。繊細優美な感覚の歌が多くなり、男性的な力強さは段々失われた。歌風は中古時代の『古今和歌集』に近い。代表的な歌人は大伴家持などである。

うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しも独りし思へば。　大伴家持　（巻十九）

［口語訳］　うらうらと照っている春の日に雲雀があがり、私の心は悲しいことだ。独りものを思っていると。

◆東歌と防人歌

『万葉集』の巻十四に東歌（あずまうた）が約二百三十首収められている。東歌は東国（現在の関東や東北）地方の人の歌並びに東国関係の人々

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com